

つよからぬは、女の歌なればなるべし。へ思ひつつ寝ればや人の見えつらむ夢と知りせばさめざらましを。色見えでうつろふものは世の中の人の心の花にぞありける。わびぬれば身をうき草の根をたえて誘ふ水あらばいなむとぞ思ふ。衣通姫の歌、わがせこが来べきよひなりささがにのくものふるまひかねてしるしも。(注2)

とある。
本稿では「衣通姫の流なり」に着目し、「衣通姫の流なり」とは何をさすのか、何故小野小町がそう評され「六歌仙」の一人となり得たのか、何故美人とされるのか、ということをや衣通姫との関連から考察していきたいと思う。(以下、記紀本文に関する所以外は「衣通姫」に統一する)

二、衣通姫伝説

一般に「衣通姫伝説」といわれるのは特に『古事記』に伝承される物語をさす。少し長くなるが、その部分を以下に挙げる。(注3)

天皇崩りましし後に、木梨軽太子、日継知らしめすに定まれるを、いまだ位に即きたまはざりし間に、そのいる妹軽大郎女に姪

けて、歌ひたまひしく、

A あしひきの 山田を作り 山高み 下樋を走せ 下どひに わがとふ妹を 下泣きに わが泣く妻を こぞこそは 安く肌触れ

こは、しらげ歌ぞ。また、歌ひたまひしく、

B 笹葉に うつや霰の たしだしに 率寝てむ後は 人はかゆとも 愛しと そ寝しさ寝てば 刈薦の 乱れば乱れ さ寝しさ寝てば

こは、夷振の上歌ぞ。

ここをもちて、百の官また天の下の人等、軽太子に背きて、穴穂御子に帰りぬ。しかして、軽太子畏みて、大前小前宿祢大臣が家に逃げ入りて、兵器を備へ作りたまひき(略)。穴穂王子も兵器を作りたまひき(略)。ここに、穴穂御子、軍を興して大前小前宿祢が家を囲みたまひき。しかして、その門に到りましし時に、大氷雨零りき。かれ、歌ひたまひしく、

C 大前小前宿祢が 金門かけ かく寄り来ぬ 雨立ち止めむ

しかして、その大前小前宿祢、手を挙げ膝を打ち、儼ひかなで歌ひ参来ぬ。その歌に曰ひしく、

D 宮人の 足結の小鈴 落ちにきと 宮人とよむ 里人も

ゆめ

この歌は、宮人振ぞ。かく歌ひ参帰て白ししく、
「わが天皇の御子、いろ兄、兵をな及りたまひそ。もし、兵を及り
たまはば、必ず人咲はむ。あれ捕へて貢進らむ」
しかして、兵を解きて退き坐しき。かれ、大前小前宿祢、その軽
太子を捕へて、率て参出でて貢進りき。その太子捕へらえて、歌
ひたまひしく、

E あまだむ 軽の嬢子 いた泣かば 人知りぬべし 波佐
の山の 鳩の 下泣きになく

また、歌ひたまひしく、

F あまだむ 軽嬢子 したたにも 寄り寝て通れ 軽嬢子
ども

かれ、その軽太子は、伊余の湯に流しまつりき。また、流さえた
まはむとせし時に、歌ひたまひしく、

G あまとぶ 鳥も使ひそ 鶴が音の 聞こえむ時は わが
名問はさね

この三つの歌は、天田振ぞ。また、歌ひたまひしく、

H 王を 島にはぶらば 船余り い帰り来むぞ わが豊ゆ
め 言をこそ 豊と言はめ わが妻はゆめ

この歌は、夷振の片下ぞ。その衣通王、歌を献りき。その歌に曰

ひしく、

I 夏草の あひねの浜の 蠣貝に 足ふますな あかして
通れ

かれ、後にまた恋ひ慕ひあへずて、追ひ行きましし時に、歌ひた
まひしく、

J 君がゆき 日長くなりぬ やまたづの 迎へを行かむ
待つには待たじ

かれ、追ひ到りましし時に、待ち懐ひて、歌ひたまひしく、

K こもりくの 泊瀬の山の 大丘には 幡張り立て さ小
丘には 幡張り立て 大小よし 仲定める 思ひ妻 あ
はれ 櫂弓の 臥やる臥やりも 梓弓 起てり起てりも
後も取り見る 思ひ妻 あはれ

また、歌ひたまひしく、

L こもりくの 泊瀬の河の 上つ瀬に 斎杖を打ち 下つ
瀬に 真杖を打ち 斎杖には 鏡を懸け 真杖には 真
玉を懸け 真玉なす あが思ふ妹 鏡なす あが思ふ妻
ありと言はば こそよ 家にも行かめ 国をも偲はめ

かく歌ひて、すなはち共にみづから死にたまひき。かれ、この二
つの歌は、誦歌ぞ。

(原文中(略))は筆者がその部分を略した。また歌の上

のAくLは筆者が付した)

以上の話は『日本書紀』(注4)にも載るが、こちらは

允恭二十三年 木梨軽皇子を立てて太子とす。容姿佳麗し。見る者、自づからに感でぬ。同母妹軽大娘皇女、亦艶妙し。太子、恒に大娘皇女と合せむと念す。罪有らむことを畏りて黙あり。然るに感でたまふ情、既に盛にして、殆に死するに至りまさむとす。爰に以為さく、徒に空しく死なむよりは、刑有りと雖も、何ぞ忍ぶること得むとおもほす。遂に竊に通けぬ。乃ち悒懐少しく息みぬ。仍りて歌して曰はく、

ア あしひきの 山田を作り 山高み 下樋を走せ 下

泣きに 我が泣く妻 片泣きに 我が泣く妻 今

夜こそ 安く膚触れ

允恭二十四年 御膳の羹汁、凝以作氷れり。天皇、異びたまひて、其の所由をトはしむ。トへる者の曰さく、「内の乱有り。蓋し親親相奸けたるか」とまうす。時に人有りて曰さく、「木梨軽太子、同母妹軽大娘皇女を奸けたまへり」とまうす。因りて、推へ問ふ。辞既に実なり。太子は、是儲君たり、加刑すること得ず。則ち大娘皇女を伊予に移す。

時に太子、歌して曰はく、

イ 大君を 嶋に放り 船餘り い還り来むぞ 我が豊
齋め 言をこそ 豊と言はめ 我が妻を齋め

又歌して曰はく、

ウ 天飛む 軽嬢子 甚泣かば 人知りぬべみ 幡舎の
山の 鳩の 下泣きに泣く

(歌の上のAくUは筆者が付した)

とあり、軽皇子と軽大郎皇女の密通事件が取り沙汰されている。日本書紀において重要なことは、皇太子であった軽太子が即位出来なかった理由を記述することが最も重要な記事であり、その事実を示すことが大切であったためと考えることができる。「皇太子であるために罪に問えない」ということが、律令国家として天皇たるもの罪を犯さない。罪を犯せば高い地位の者でも追い落とされ、身の破滅を招くと、良い意味でも悪い意味でも天皇たるふさわしさが記されているのである。一方、古事記においては、当然日本書紀と同じように天皇になるべき者の資質は語られるが、それはむしろ穴穂御子(後の安康天皇)の所に語られている。

古事記では、軽太子と軽大郎女との密通事件に重きを置いて、よりドラマティックに、より印象深げに記している。

皇太子であるにも関わらず、同母妹に恋心を募らせ、禁忌を犯す行為に至らざるを得ない若い男女の悲恋物語として記され、結果人々の記憶に残ったこの物語に、当時の人々はどのような心情を抱いたのだろうか。禁忌を犯しても構わないと思える程の女性、軽大郎女とはどのような女性だったのだろうか。

古事記の皇統譜には

…この天皇、意富本杼王の妹、忍坂大中津比売命を娶りて生みたまへる御子、木梨軽王。次に長田大郎女。次に境黒日子王。

次に穴穂命。次に軽大郎女、亦の名は衣通姫郎女（御名を衣通王と負せるゆゑは、その身の光、衣より通り出づればぞ）。

とある。注目すべきは、「その身の光、衣より通り出づればぞ」である。それは着衣を透けて見えるほどの光り輝く美しさであるという。このような稀有な美を持つ女性ならば、何百年に一人、千年に一人でもおかしくあるまい。思いめぐらせれば、世界三大美女と言われる女性は今から千年以上に歴史に登場した女性である。ところが、允恭天皇の時代そのような女性がもう一人いたと日本書紀に記されているのである。

三、もう一人の「衣通姫」

允恭紀の「衣通姫」は次のように記されている。

七年 新室の宴の時「妾が弟、名は弟姫」とまうしたまふ。

弟姫、容姿絶妙れて比無。其の艶しき色、衣より徹りて見れり。是を以て、時人、號けて、衣通郎姫と曰す。天皇の志、衣通郎姫に存けたまへり。故、皇后を強いて進らしむ。皇后、知らしめして、輒く禮事言したまはず。爰に天皇、歡喜びたまひて、則ち明日、使者を遣して弟姫を喚す。

また、軽大郎皇女については、

允恭二年 忍坂大中姫を立てて皇后とす。皇后、木梨軽皇子・

名形大娘皇女・境黒彦皇・穴穂天皇・軽大娘皇女・八鈞白彦皇子・大泊瀬稚武天皇・但馬橘大娘皇女・酒見皇女を生れませり。

とあるので、軽大郎皇女と衣通郎姫と呼ばれる皇后の妹である弟姫は姪と叔母の関係ということになる。日本書紀での衣通郎姫は、前述のように姉の口からその美しさが語られる。衣通郎姫と称される弟姫には、どのような伝承があるのだろうか。以下、日本書紀の記述では、

允恭八年 藤原に幸す。密に衣通郎姫の消息を察たまふ。是夕、衣通郎姫、天皇を戀びたてまつりて独居り。其れ天皇の臨せることを知らずして、歌して曰はく、

① 我が夫子が 来べき夕なり ささがねの 蜘蛛
の行ひ 是夕著しも

天皇、是の歌を聆しめして、則ち感でたまふ情有します。而して歌して曰はく、

② ささらがた 錦の紐を 解き放けて 数は寝ず
に 唯一夜のみ

明旦に、天皇、井の傍の桜の華を見て、歌して曰はく、
③ 花ぐはし 桜の愛で 同愛では 早くは愛でず

我が愛づる子ら

皇后、聞しめして、且大きに恨みたまふ。是に、衣通郎姫、奏して言さく、「妾、常に王宮に近きて、昼夜相續ぎて陛下の威儀を視むと欲ふ。然れども皇后は、妾が姉なり。妾に因りて恒に陛下を恨みたまふ。亦妾が為に苦びたまふ。是を以て、冀はくは、王居を離れて、遠く居らむと欲ふ。若し皇后の嫉みたまふ意少しく息まむか」とまうす。天皇、則ち更に宮室を河内の茅渟に興造てて、衣通郎姫を居らしめたまふ。此に因りて、屢日根野に遊獵したまふ。
十一年 衣通郎姫、歌して曰はく、

④ とこしへに 君も会へやも いさな取り 海の

濱藻の 寄る時時を

時に天皇、衣通郎姫に謂りて曰はく、「是の歌、他人にな聆かせそ。皇后、聞きたまはば必ず大きに恨みたまはむ」とのたまふ。故、時人、濱藻を號けて、奈能利會毛と謂へり。是より先に、衣通郎姫、藤原宮に居りき。時に天皇、大伴室屋連に詔して曰ひしく、「朕、頃美麗き嬢子を得たり。是、皇后の母弟なり。朕が心に異に愛しとおもふ。冀はくは其の名を後葉に伝へむと欲ふこと、奈何に」とのりたまひき。室屋連、勅に依せて奏すに可されぬ。則ち諸国造等に科せて、衣通郎姫の為に、藤原部を定む。

(歌の上の①～④は筆者が付した)
とある。この内容をみてみると、これまでも古事記に記載された天皇と若い妻に対する、年長の妻の嫉妬が絡んだ恋物語の一つと捉えられ、悲恋物語とは言いにくい。このような物語としては、神話においては、オオクニヌシとスセリビメ・ヌナカハヒメ、仁徳記のイハノヒメ・ヤタノワキイラツメなどが思い起こされる。しかし允恭記に関しては嫉妬物語ではなく、それは日本書紀に記載されていることになる。

四、歌から見る「衣通伝説」

(表中のゴシック太字は「衣通姫」の歌とされる)

捕らわれる	密通	人	
<p>F あまだむ軽嬢子したたにも寄り寝て通れ軽嬢子ども</p> <p>E あまだむ軽の嬢子いた泣かば人知りぬべし波佐の山の鳩の下泣きになく</p> <p>D 宮人とよむ里人もゆめ</p> <p>C 大前小前宿祢が金門かげかく寄り来ね雨立ち止めむ</p>	<p>B 笹葉にうつや霰のたしだしに率寝てむ後は人はかゆとも愛しとそ寝しさ寝てば刈薦の乱れば乱れさ寝しさ寝てば</p>	<p>軽太子・軽大郎女(衣通王)</p>	古事記
	<p>泣く妻片泣きに我が泣く妻今夜こそ安く膚触れ</p>	<p>軽皇子・軽皇女</p>	日本書紀1
<p>④ とこしへに君も会へやもいさな 取り海の濱藻の寄る時を</p>	<p>③ 花ぐはし桜の愛で同愛でば早くは愛でず我が愛づる子ら</p> <p>② ささらがた錦の紐を解き放けて数は寝ずに唯一夜のみ</p>	<p>允恭天皇・弟姫(衣通姫)</p>	日本書紀2
	<p>① 我が夫子が来べき夕なりささがねの蜘蛛の行ひは夕著しも</p> <p>② わが背子が来べき宵なりささがにの蜘蛛のふるまひかねてしるしも</p>	<p>(帝)・衣通姫</p>	古今集

心中				伊予配流		
L	K	J	I	H	G	
かめ国をも偲はめ	こもりくの泊瀬の河の上つ瀬に齋 杖を打ち下つ瀬に真杖を打ち齋杖 には鏡を懸け真杖には真玉を懸け 真玉なすが思ふ妹鏡なすが思 ふ妻ありと言はばこそよ家にも行	君がゆき日長くなりぬやまたづの 迎へを行かむ待つには待たじ	夏草のあひねの浜の蠣貝に足ふま すなあかして通れ	むぞわが豊ゆめ言をこそ豊と言は めわが妻はゆめ	あまとぶ鳥も使ひそ鶴が音の 聞 こえむ時はわが名問はさね	
			大君を嶋に放り船餘りい還り来むぞ 我が豊齋め言をこそ豊と言はめ我が 妻を齋め 天飛む軽嬢子甚泣かば人知りぬべみ 幡舎の山の鳩の下泣きに泣く			

以上は一般に「衣通姫伝説」と呼ばれる古事記記載の歌を中心に、それに相当する日本書紀（「I」とする）と嫉妬物語の歌を中心にした物語（「日本書紀2」）、さらに古今集の歌を表にしたものである。（記号は本文に筆者が付したもの）

ここからわかることは、古事記ではAとLの十二首の内、衣通姫が歌ったとされるものはIとJの二首。日本書紀では衣通姫の歌は三首の内、一首もない。つまり、「衣通姫伝説」は軽太子の歌を軸に伝えられていて、その相手としての衣通姫が存在することになる。歌からの考察を進めると、古事記歌謡には五つの歌曲名が施されている。A「しらげ歌」B「夷振の上歌」D「宮人振」E・F・G「天田振」H「夷振の片下」K・L「読歌」となり、歌曲名の付かない歌はC・I・Jの三首となる。しかしCはDの前に置かれ劇的所作などを考慮するとまるで劇中の説明のようにも思われる。残るIとJは共に衣通姫の歌とされるものであるが、古事記においてこの伝説の中で突然「衣通王」と表記される歌である。

密通事件の当事者である衣通姫の歌Iは、一般には、浜辺での歌垣の歌、あるいは浜辺の遊女の歌と考えることができ、浜辺の歌垣における男性への誘い歌と考える説が多く、特に第二句の「あひねの浜」から「相寝」が連想され軽太子との

関係、伊予への経路からここに取り込まれたと考えられる。

次の歌Jは通い婚の時代の女心が非常によく伝わってくる歌である。特に終句の「待つにや待たじ」は恋しくていたたまれない「逢いたい」という思いが強くと響いてくる句であり、それを終句に置くことによって、切ない恋慕の情が強く余韻として残る歌となっている。まさに、伊予に配流となつた愛しい夫、軽太子に「逢いたい」と思う場面にびつたりな歌であると言える。

実はこの歌は、万葉集卷二巻頭に磐姫皇后（以下イハノヒメ）作とする四首一連の歌群の第一首と同歌である。万葉集の記述を引用する。（注5）

難波高津宮御宇天皇代

磐姫皇后の、天皇を思ひて作りませる御歌四首

八五 君が行き日長くなりぬ山たづね迎へか行かむ待ちにか
待たむ

右の一首の歌は、山上憶良臣の類聚歌林に載す。

八六 かくばかり恋ひつつあらずは高山の磐根し枕きて死な
ましものを

八七 ありつつも君をば待たむ打ち靡くわが黒髪に霜の置く
までに

八八 秋の田の穂の上に霧らふ朝霞何処辺の方にわが恋ひや
まむ

ある本の歌に曰はく

八九 居明かして君をば待たむぬばたまのわが黒髪に霜はふ
るとも

右の一首は古歌集の中に出づ。

古事記に曰はく「軽太子、軽太郎女に奸く。故、その太子
を伊予の湯に流す。この時、衣通王、恋慕に堪へずして追
ひ往く時の歌に曰はく

九〇 君が行き日長くなりぬ山たづの迎へを往かむ待つには
待たじ（ここに山たづと云ふは、今の造木なり）

といへり。右の一首の歌は古事記と類聚歌林と説ふ所同
じからず。歌の主もまた異なれり。因りて日本紀を検ふ
るに曰はく「難波高津宮に天の下知らしめしし大鷦鷯天
皇の二十二年春正月、天皇、皇后に語りて『八田皇女を
納れて将に妃となさむとす』といへり。時に皇后聴さず。
ここに天皇歌よみして皇后に乞ひたまひしく云々。三十
年秋九月乙卯の朔の乙丑、皇后紀伊国に遊行して熊野の
岬に到りて其処の御綱葉を取りて還りたまひき。ここに

天皇、皇后の在しまさざるを伺ひて八田皇女を娶きて宮
の中に納れたまひき。時に皇后、難波の済に到りて、天
皇の八田皇女を合しつと聞かして大くこれを恨みたまひ
云々。」といへり。また曰はく「遠飛鳥宮に天の下知らし
めしし雄朝孀稚子宿祢天皇の二十三年春三月甲午の朔の
庚子、木梨軽皇子を太子としたまひき。容姿佳麗しく、
見る者自ら感でき。同母妹軽太娘皇女もまた艷妙。云々。
遂に竊かに通け、すなはち悒しき懐少しく息みぬ。二十
四年夏六月、御羹の汁凝りて氷となりき。天皇異しびて、
その所由を卜へしむるに、卜者の曰さく『内の乱あり。
けだし親々相奸けたるか云々。』奸といへり。よりて太娘
皇女を伊予に移す」といへり。今案ふるに二代二時にこ
の歌を見ず。

とある。このように万葉集では、夫である仁徳天皇の還幸を
待ちわびる心情を歌っていて、記紀の嫉妬深いイハノヒメ像
とは異なる女性として描かれている。つまり、この歌がイハ
ノヒメの歌であるとの理解は古代においても確定されていた
訳ではないことになる。それよりも、九〇の左注に注目する
と、むしろ編者は山上憶良がイハノヒメの歌とする八五の歌
をもう一度取り上げ、古事記と類聚歌林との伝承を比較し、

さらに日本紀の伝承をも検証している。それはこの歌が、元は独立歌であったことを示していると考えられる。そして、この仁徳天皇とイハノヒメは、允恭天皇の父と母に当たる。

さてここで、もう一人の衣通姫の物語をみてみたい。日本書紀二をみると、①と④が衣通姫の歌。②と③が允恭天皇の歌ということになる。そしてその①の歌が、後に古今集に引かれる衣通姫の歌ということになる。男女の恋の歌の遣り取りと言えるもので、作者が天皇と衣通姫でなくても成立する内容であるが、中国故事の俗信で古代の恋占ともいえるような「蜘蛛の行い」や「なのりそ」の由来などが歌われ点に、古代の恋がイメージされて、時代を経た現代でも興味を引く歌となっていると思われる。

このように古事記の歌群のそのほとんどに歌曲名が記されているということは、宮廷歌謡であるということであり、この密通事件は歌と共に宮廷内で伝えられていたことを意味し、この歌を通して平安朝の貴族達は「衣通姫伝説」を認識していたと思われる。

ところが、平安朝の貴族たちは、正史である日本書紀を読んでいたとされている。とすれば「衣通姫伝説」は古事記歌謡と共に伝承されながらも、一方では日本書紀の弟姫こそが

「衣通姫」であり、密通事件の衣通姫は「軽太郎女」であると考えていたと思われる。記紀両書の記述から「衣通姫」の歌と明記されるのは記I・Jと紀①と④の四首ということになるが、当時は「衣通姫」の歌は紀①と④と認識していたと考えられるのである。

五、玉津島神社

ところで、「衣通姫」は和歌の浦にある玉津島神社の祭神として知られる。和歌の浦は万葉の時代から歌枕として知られる場所である。

玉津島が初めて文献に見られるのは、神亀元（724）年のことで、十月五日、聖武天皇の紀伊国玉津島行幸。十月八日、海部郡玉津島の頓宮に至り、十日間あまり滞在した（注6）。万葉集には、随行した山部赤人が若の浦や玉津島の歌を作ったとある。さらにその後、天平神護元（765）年の称徳天皇、延暦二三（804）年の桓武天皇の玉津島行幸があった。

社伝によれば、光孝天皇（注7）の夢枕に衣通姫が現れ、「立ちかえりまたもこの世に跡垂れむその名うれしき和歌の浦波」と詠んだので衣通姫を玉津島神社にお祀りしたとある。

それ以降、玉津島神社は、住吉大社、柿本神社と並ぶ「和歌三神」(注8)の社として、平安時代から天皇はじめ宮中の貴族、歌人など和歌の上達を願う人々の参詣や和歌の奉納が行われ、信仰されていたようである。その「和歌三神」の一人であるとされる衣通姫の歌は、実際この歌と記紀の歌を合わせてもたったの五首しかない。「和歌」という言葉に引かれて歌の神となったのであろうか。衣通姫の歌として取り上げられる歌といえば、古今集墨滅歌である。「和歌三神」の一人で歌聖と称えられる柿本人麻呂の歌は、時代が下り江戸時代になってもいろいろな歌が取り上げられるにもかかわらず、衣通姫の歌は歌そのものではなく、前述のように「蜘蛛の行い」や「なのりそ」という語、さらには「玉津島」の関連として取り上げられているものが多い。

玉津島神社には他に「稚日女尊」「息長足姫尊」「明光浦霊」が祭神として名を連ねる。神功皇后がこの地・和歌の浦の玉津島神社に祀られているが、ここでは「歌」との関係性が全く見いだせない。住吉大社との関連であろうか。

一方で、『肥前国風土記』の神功伝承に玉島の小河での鮎釣りに関する伝承がある。佐賀県唐津市には神功皇后が裳の糸を垂らして鮎を釣ったというその伝承地が玉島川にあり、「垂綸石」まで存在する。そのすぐ近く、川に面して「玉島神社」

と呼ばれる小さな社がある。階段の鳥居には「玉島神社」ではなく「神功皇后宮」と刻まれた石の扁額があり、手水舎では鮎の口から水が流れ、その奥には釣りをした時の笹竹を挿したものが根付いたと言われる笹竹の一群がある。創建などは詳しくわからないが、玉島川の中流から下流辺りの「玉島神社」と和歌の浦に面して建つ「玉津島神社」には何らかの関連性があると思われるが、これに関しては稿を改めて論じる事とする。

この「玉島神社」の西側にはかの有名な褶振峰(鏡山)があり、そこには「衣の袖を挙げて領巾を振った」美女の悲恋物語、松浦佐用姫の物語が伝えられている。「衣通姫伝説」とは内容が異なるが「日本三大悲恋物語」の一つ「松浦佐用姫伝説」には、禁忌を犯して契りを結んだ故に死ぬ運命を余儀なくされる女性の姿と同時に、遠く離れた地の夫を思う女性の姿が伝えられているのである。

六、万葉仮名と六歌仙

古今集真名序をみれば、「和歌仙」として取り上げているのは柿本人麻呂と山部赤人であることがわかる。後に「六歌仙」と称される僧正遍照、在原業平、文屋康秀、喜撰法師、小野小町、大伴黒主は古今集編纂以前に歌人として名が通っていたようであるが、それは国風暗黒時代と呼ばれる漢詩優勢の

時代のことである。その時代のことを片桐洋一氏は、「公的には漢字文化が支配的であった時期にも和歌は存在していた。

公の場ではなく、恋の場など、男と女の接点では和歌は生きていたのである。：撰関政治の時代になると、後宮社会は活性化し、和歌が重要な役割を果たすようになる。そして、和歌の伝達と作歌事情の伝承は、口頭で行われるか『女手』と言われる『かな』によって行われてきたのである。」「…は筆者が略した）（注9）と述べられている。

- ・ やすみししわご大君の常宮と仕へ奉れる雑賀野ゆそがひに見ゆる沖つ鳥清き渚に風吹けば白波騒ぎ塩干れば玉藻刈りつつ神代よりしかぞ貴き玉津島山（九一七）
- ・ 沖つ鳥荒磯の玉藻潮干満ちい隠り行かば思ほえむかも（九一八）

・ 若の浦に潮満ち来れば潟を無み葦辺をさして鶴鳴き渡る（九一九）

・ 玉津島磯の浦廻の真砂にもにほいて行かな妹も触れけむ（一七九九）

これらは、万葉集記載の玉津島行幸に随行した山部赤人と柿本人麻呂の歌である。海を隔てて四国と対面する和歌の浦の風景と共に、特に柿本人麻呂一七九九の最終句「妹も触れ

けむ」が、「衣通姫伝説」を連想させ柿本人麻呂を尊敬する紀貫之の脳裏に焼き付いたかもしれない。それは漢字表記の「万葉仮名」によって和歌を書いた時代の歌であった。

万葉集中最多の歌を載せるのは、編者の一人とされる大伴家持、次いで柿本人麻呂、そして大伴坂上郎女と続く。その柿本人麻呂を紀貫之は崇拜していた。古今集においては、編者の一人、紀貫之の歌が最多で、女流歌人としては伊勢（注10）が多く、当時の歌人の中でも伊勢は群を抜いている。

つまり古今集編纂時の代表的な女流歌人は、伊勢と思われる。小野小町はそれ以前の女流歌人であり、片桐氏の言葉を借りれば、「万葉仮名」と呼ばれる「仮名」（漢字）で歌を書いていた可能性もある。その小野小町は、仁明朝の宮廷サロンで姉と共に更衣として歌を作っていたのである。

七、紀貫之の「衣通姫」像——小町へ

紀貫之は古今集撰録の頃はまだ三十代と思われる、貫之自身の歌も「知巧性が先立ち過ぎているのも目につく」と言われる。貫之にとって、三十代で得た勅撰集編纂の大役は非常な名誉であって、「貫之が歌人として有名でなければ平凡な下級貴族の生涯を送っていた」とも述べられている。（注11）

古今集仮名序で、紀貫之は小野小町の歌を「小野小町は、いにしへの衣通姫の流なり。あはれなるやうにて、つよからず。いはば、よき女のなやめるところに似たり。つよからぬは、女の歌なればなるべし。」と評している。つまり、女性らしい歌として「あはれなるやうにて、つよからず。」という特徴を挙げているということである。そしてそれこそが「衣通姫の流れ」ということであろう。

ここで仮名序に挙げられた小野小町の歌を見てみる。

・思ひつつ寝ればや人の見えつらむ夢と知りせばさめざらましを（五五二）

（あの人のことを恋しく思いながら寝たから、あの人が夢に見えたのでしょうか。夢だと知っていたならば、目を覚ますなんてしなかったでしょうに）

・色見えでうつろふものは世の中の人の心の花にぞありける（七九七）

（色にあらわれずに褪せてしまうものは、世の中の人の心という花なのでしょね）

・わびぬれば身をうき草の根をたえて誘う水あらばいなむとぞ思ふ（九二八）

（つらい思いで過こしているうちに、我が身が嫌になって

しまったので、根の無い浮草が水に乗って流れて行くように、私も誘ってくれる人がいるのなら都を去ろうかと思つていきます）

これらの小野小町の歌からは、むしろ万葉女流歌人の大伴坂上郎女を連想する。なぜ、紀貫之は衣通姫を小野小町の引き合いに出すのだろうか。歌人として名を馳せていた小野小町と古代宮廷で美人の誉れ高い悲恋の主人公、衣通姫のイメージはどのように重ねられたのであろうか。

記紀・万葉の時代から時を経て漢字文化全盛の時代に、それでも男女の間で交わされた恋の歌は「万葉仮名」のような文字で記された。「かな文化」が興り、それゆえ女性が恋の歌をかな書きするようになると、歌を交わす相手の男性も自然とかな文字によって恋の歌をしたためた。表意文字である漢字を使った「万葉仮名」では、歌の遣り取りで文字を読んでその心情は伝わりにくい。むしろ表音文字の「かな」であれば、その歌に込められた心情も伝わってくる。「大和言葉」を表すのにびつたりな文字は、心情をもよく表し、それゆえ作歌にはうってつけの文字であったであろう。それは紀貫之が和歌を中心に心の思いを綴るに相応しい文字で、つまり日記を「かな」で書くためにしたためた『土佐日記』の冒頭「男

もすなる日記というものを、女もしてみんとてするなり」の一文にその思いを読み取ることができる。「かな」によって歌を、日記を書くためには女性に仮託しなければならなかった。

古今集編纂の頃の代表的な女流歌人としては伊勢を挙げる事ができるが、紀貫之にとつて伊勢は「かな書き和歌」の代表であり同時代の歌人であった。その伊勢へと続く前時代の著名な女流歌人として紀貫之は小野小町を取り上げた。そして更に遡つて衣通姫へとイメージされた理由には次の二つのことがあつたと思われる。一つには、姉妹で天皇の傍に召された妹の方であるということ。いま一つは、漢字を駆使した文字で歌を作つていたこと。つまり、前時代の「仮名書き和歌」の女流歌人として二人を意識し重ねあわせたのではないだろうか。

天皇の傍らで、男を寄せ付けない女性としてイメージされた小野小町は、「待つ女のイメージ」(五五二)と、「人の心の花」(七九七)として、いずれ色褪せてしまうという不安と、「都を離れる」(九三八)心情とを歌う。これはまさに『日本書紀』の衣通姫の姿であり、人を惹きつける艶やかさを持つ女性。並外れた容色であるが故に、都から離れて暮らす。だからこそ愛しい人にいつでも会える訳ではない。忘れられて

しまうのではないかという不安を抱え、ただ愛しい人の訪れを待つ身の衣通姫。人であるがゆえに恋しさを募らせ、来ぬ人をけなげにも悩ましく待つ女性像を「あはれなるやうにて、つよからず。いはば、よき女のなやめるところに似たり。」と小野小町に重ねたのではないだろうか。

紀貫之は、恋に悩み、物思いに耽る美女・衣通姫の姿をそこにみたのであろう。小野小町は「よき女」であるがゆえに後の世に語り継がれ伝説となった。衣通姫もまた、「よき女」ゆえに伝説となった。宮中でその伝説は語られ、和歌の神となり、多くの歌人に信仰され、地蔵となった。京都左京の願海山法性覚院西方寺は関白藤原師実(注12)の孫、経宗(1118〜1189)の開基。「寺伝によれば、允恭の皇后の妹・弟姫(衣通姫)が七歳の時、疫病で亡くなり、



冥土で生身の地藏を拝し蘇生、その報恩のために造られたもの」とされる「衣通姫地藏尊」が祀られているが、現在は、美しく化粧されたその地藏そのものが衣通姫であるとして信仰されている。



*参考文献

- 注1 有吉保編『和歌文学事典』、桜楓社、昭和五七年。
二二二頁下〜二二三頁上。文中「…」は筆者が略した。
- 注2 高田祐彦訳注『新版古今和歌集』、角川ソフィア文庫
- 注3 西宮一民校注 新潮日本古典文学集成『古事記』、新潮社、昭和五七年。
- 注4 黒板勝美編『日本書紀』、岩波文庫、1987年。
- 注5 中西進編『万葉集』、講談社文庫、2006年。
- 注6 宇治谷孟訳『続日本紀(上)』、講談社学術文庫、1993年。
二四六頁。さらに次頁にかけて十月十六日の記事に「…次のように詔した。『山に登り海を眺めるのに、このあたりは最も良い。わざわざ遠出しなくても遊覧に充分である。それ故、弱の浜という名を改めて、明光浦とし、守戸を設けて、荒れたり穢れたりすることのないようにせよ。また春と秋の二回、官人を派遣して、玉津島の神と明光浦の靈に供物を供え祭らせるようにせよ』と。」ある。
- 注7 第五八代天皇。天長七(八三〇)〜仁和三(八八七) 元慶八(八八四)即位。仁明天皇の第三皇子。古今集に二首。
——君がため春の野に出でて若菜つむわが衣手に雪はふり
つ
- 注8 住吉神社、柿本神社、玉津島神社をいう。注1によれば、和歌の守護神として、和歌に縁深い神やすぐれた歌人を三柱あげたもの。住吉三神として表筒男命・中筒男命・底筒男命、

三聖として人丸・赤人・衣通姫をあげる説や住吉社・玉津嶋
姫社・天満宮とする説などがあるという。一説には、玉津嶋

神社、柿本神社、天満宮を指すというものもある。(注1他)

注9

片桐洋一編、新潮古典文学アルバム『伊勢物語・土佐日記』、

新潮社、一九九〇年。『伊勢物語』一頁。

注10

生没年未詳。元慶元(八七七)年頃、天慶元(九三八)年以
降まもなく没か。宇多天皇皇后温子に仕え、後に宇多天皇の
寵を得て、寛平末年頃皇子を生んだ。その後も温子の女房で
あることに変化はなかった。伊勢の御、伊勢の御息所の称が
ある。延喜七(九〇七)年温子崩御後、敦慶親王との関係が
生じ中務が生まれている。伊勢が記したとされる仮名日記は
歌合日記の先駆として注目される。古今集女流歌人の筆頭。
三十六歌仙の一人。(注1 三十二〜三十三頁より抜粋)

注11

注9に同じ。『土佐日記』七三頁。

注12

長久三(1042)〜康和三(1101)。摂政太政大臣藤

原頼通の男。母は藤原種成女の祇子。京極殿・後宇治殿と号

す。従一位摂政関白。和歌に優れ、『後拾遺和歌集』に一首。

それ以下の勅撰和歌集に十六首が入首。家集に『京極関白集』

(他撰)がある。完本は現存せず、十六首分の断簡がったわ

る。嘉保元(1094)年の『高陽院七番歌合』は有名。『京

極関白記』がある。(注1他)

なお、写真は小町塚・京都山科・随心院、衣通姫地蔵・京都左京区・

西方寺にて筆者が撮影した。